第10回「泉大津市オリアム随筆賞」

【優秀賞】

毛布が紡いだ絆

萩原　友美・宮城県石巻市

東日本大震災が起こった三月十一日、大地が揺らぎ、海は大きく踊った。天はどこかが裂けたかのようにたくさんの雪を地上に落とした。夜に星は見えたのだろうか。空を見上げた人はいただろうか。私はできなかった。私も、周りにいた人たちも下を向いていた。でも、四人の見知らぬ人たちと一枚の毛布にくるまって夜を過ごして、私には力を合わせる仲間ができた。協力して行動するために顔を上げて前を向いた。あれから十年経って、もう顔を思い出すこともできないけれど、一番困難なときを一緒に乗り越えた四人の思い出は、これからも決して忘れることはない。

真っ暗な夜の闇の中に踏切のカンカン鳴る音だけが響いていた。車のラジオは海岸に約二百人が打ち上げられている、気仙沼の町が火に包まれていると繰り返すばかりで、どうしてそうなったのかがまったく分からない。しばらくして、踏切が壊れていることに気が付いた。列車など来ないのにずっと鳴り続け、ほかに車のいない道で私は何十分もじっと待っていたのだ。冷静ではなかった。

道路は大渋滞で少しも進まない。道路の先が水没して進みようがなかったのだ。どこにも行けないならトイレを確保しなくてはと、ガソリンスタンドの裏に車を停めた。小さな明かりが見えた。スタンドでは自家発電で明かりをつけ、行き場を失った人に事務所を開放していた。薄暗い事務所の中には二十人くらいの人がいて、みんな下を向いて座り込んでいた。奥の小上がりのようなスペースにいくらか隙間を見つけて私も座った。話す人も泣く人もなく、事務所の中はしんと静まりかえっていた。

「よかったら、入りませんか。」

という声が聞こえるまで、しばらく下を向いて放心したままだったと思う。いつの間にか隣にいた女性二人が毛布を広げていた。二人は親子で、車の中にいつも積んでいる毛布を持ってきたのだと言い、近くの男性二人にも同じように声を掛けた。親切な申し出に感謝して、五人で同じ毛布にくるまって横になった。毛布は薄いものだったけれど、体がむき出しではないだけでなんだか安心できた。体に触れる繊維が柔らかく、暖かい。三月だというのに雪がちらつく寒い夜だったけれど、毛布の中は五人の体温でぬくもって、一人だけれど孤独ではないような気持ちがした。この夜に眠ることができたのは、この暖かさをくれた毛布のおかげだった。

朝になると、同じ釜の飯ではないけれど、同じ毛布にくるまって眠った連帯感のようなものが芽生えて、私たちは知っていることや体験したことを話し合った。協力して活動を

することになったのは自然な流れだった。周囲の様子がどうなっているのか調べること。食料を買うことができる店を探すこと。そして、誰にとっても大事だったのは家族の安否を確認することだ。事務所を基地にして、私たちは情報交換しながら今できることを考えてはせっせと実行した。津波の被害を免れたコンビニが営業しているようだ。日赤病院に担ぎ込まれた人の名前が張り出してあるらしい。情報を得ると五人で手分けして確認に出向いた。一人ではできないことだった。相談できる相手がいることの心強さをしみじみ思った。昨日までまったく知らなかった人たちと励まし合って行動している。この出会いがなければまだ座り込んだままだっただろう。

町が湖のようになっていて、人工的に排水することは当分期待できないことを知ったときも、私たちは五人でどうしたらいいか話し合った。そして、ここで待っていてもどうにもならないのならとみんなで脱出することを決めたのである。うまく行かなかったらここに戻ることを確かめ合い、同じ方向を目指す同士に分かれて崖を降り、水の中を歩いた。幸い水は腰まで届かなかったが、どこに何があるか分からない水の中を歩くのは怖い。穴や側溝に落ちてけがをしても、今は病院で手当てしてもらえる見込みがない。一緒に進む仲間と手を握り合って、足で先を探りながら少しずつ少しずつ進んだ。乾いた道路が見えたときには、握り合った手に力が入った。

「ここからはお別れになるね。」

「ここまでありがとう。気を付けて。」

「もし帰れなかったら、あそこでまた。」

そう言って別れたまま十年が経った。私は家に帰れたが、ほかの人たちはどうだったろうか。気になっても様子を見に行くことができる状況ではなかった。だけど、きっと大丈夫だったと信じている。あのとき、勇気もみんなで分け合ったのだ。きっと、みんな前を向いて進んでいったはずだ。一人で途方に暮れていたときに、一枚の毛布が止まり木になって仲間ができて、人は助け合える、絶望なんかしないで頑張れると教えてくれた。一緒に助け合ったあの日の仲間のことを思うと、今でも心がぎゅっと切なく、あたたかくなる。